

コンラット・グレーベルのトーマス・ ミュンツァーへの書翰研究

榊 原 巖

1

1524年9月4日付けのヴァディアン宛ての手紙の中で、コンラット・グレーベルは、「いま、わたくしが何をしているかと、あなたはおたずねになっている」という書きだしで、「カールシュタットには二度目の手紙を、トーマス・ミュンツァーには初めての手紙を書いています。多分、ルッターにも、神のこぼへへの信頼にささえられて、はげしくぶつつかって行くことになりましょう」といっている。

カールシュタットはアンドレアス・ボーデンシュタイン・フォン・カールシュタット (Andreas Bodenstein von Carlstadt) と呼ばれ、はじめ、ウィッテンベルク (Wittenberg) にあって、ルッターの有力な協力者であったが、ルッターの極端なヤコブ書批判に左袒できなかつたのと、幼児洗礼否定の立場をとっていたため、ウィッテンベルクを追われた学者であった。トーマス・ミュンツァー (Thomas Müntzer) は通常、南ドイツの農民戦争の神学的指導者として知られているが、そのラディカルな聖書主義と幼児洗礼否定のゆえに、スイスのアナバプティストたちに、きわめて強い親近感をもたれていた。ルッターは、むしろ、ツウィングリに近く、*corpus christianum* を基盤とする宗教改革を目標とし、カールシュタットやミュンツァーとはついに相容れない存在であった。グレーベルがカールシュタットやミュンツァーにあてて手紙を書いたのも、この親近感からであったと思われる。ヴァディアン宛てのこの手紙の一寸さきを読むと、この頃、かれはツウィングリの宗教改革に少なからず失望を感じていたらしい節があり、内に鬱積するこの不満を打開するために、スイスの国境を越えた広い世界に知己を求めたものと思われる。

グレーベルの書翰を受けとったカールシュタットは友人で、しかも義理の兄弟でもあった博士ゲルハルト・ウェスターブルグ (Dr. Gerhard Westerb-

urg) に8冊のまだ印刷になっていない小冊子に添えて一書を托し、グレーベルにおくり、遠からずツューリッヒ往訪するむねを告げて来た。10月の後半になって、カールシュタットは約束どおり、ツューリッヒへ来たが、グレーベルたちの予期に反して、わずか数日、ここに止まっていただけでパーゼルへ行ってしまった。なぜか、その理由はわからない。

トーマス・ミュンツァーとグレーベルたちとの関係は、カールシュタットの場合と少しちがう。グレーベルも、かれの同志も、ミュンツァーについては、かれの著作であった『キリスト教信仰と洗礼』、並びに『こけの信仰』のふたつのトラクト以上のことは何も知っていなかった。しかし、その洗礼感がかれの親近感を強く喚起したらしく、「愛する兄弟トーマス」と呼びかけているのである。ミュンツァー宛でのグレーベルの長い書翰は、多分、ミュンツァーの手にとどかなかった。今もサン・ガレンの市の図書館に保存されており、グレーベルのアナバプティスト思想研究の重要な源泉のひとつとなっている。最近、この書翰の原本の写真版と、その活字版と英訳とを公刊したJ・C・ウェンガー (J. C. Wenger) は、この間の経緯を推論して、「この書をとどけた使者がアルシュテットに到着したとき、ミュンツァーはすでに町を離れた後であった。どう扱ってよいか、使者の考えに浮んだ唯一の道は、その手紙をスイスへ持ち帰ることであった。グレーベルは1526年の夏、マイエンフェルトでベストにたおれており、この書翰を今日にまで伝えることができたのは、かれの義理の兄、ヴァディアンのおかげであった⁽¹⁾」といている。ミュンツァーは1524年の秋、スイスへ旅をしていることは確かであるが、グレーベルたちと会ったことを証明する資料はひとつもない。

最近、ミュンツァー研究をだしたマンフレッド・ベンジンク (Manfred Bensing) は「当時のひとびとのいうところをあえて信じれば⁽²⁾」という但書きつきで、ミュンツァーがグレーベルやマンツたちとパーゼル滞在中に会ったといっている。

ただ、ツウィングリの後継者で、アナバプティストをひどく敵視していたハインリッヒ・ブリンガー (Heinrich Bullinger) だけは別で、かれは特にア

[1] J. C. Wenger, Conrad Grebel's Programmatic Letters of 1524, p. 10.

[2] 日本語訳『トーマス・ミュンツァー ドイツ農民戦争と革命の神学』田中真造訳、未来社 1970年刊。

ナバプティスト中傷を目的とする書物二冊と、『宗教改革史』を出版しているが、1560年出版の『アナバプティストの起源⁽¹⁾』の中では、アナバプティスト派の行き方をトーマス・ミュンツァーの影響と断定し、1572年の『宗教改革史⁽²⁾』の中では、この影響は単に書物のみによらず、トーマス・ミュンツァーが1522年秋、ルッターに追われてスイスに旅行したとき、グレーベルその他、かれの同志と接触したことによって定着、強化されたと説いている。プリンガーのこのミュンツァーとグレーベル派の接触交渉説はヤコブ・ベルヒトルト (Jacob Berchtold) の近頃の研究⁽³⁾によって覆えされ、事実無根の捏造説であるということが今日ではすでに通説となっている。プリンガーの前後三たびにわたる執拗なミュンツァー＝グレーベル交渉、影響説流布のこの努力において、かれが眼目としていたその動機は、アナバプティスト派の発祥をツウィングリに対するグレーベル派の抵抗からという歴史的因果論を否定するためであったらしい。恩師に対するプリンガーの敬虔な態度はうなずけるが、アナバプティスト派の歴史をまげてまで極論しようとしたその態度は採らない。

ミュンツァーのグレーベル派に対する影響の有無の検証のためには、グレーベルがミュンツァー宛てに書いた長文の書翰を一読するのが何と云ってもはやみちである。この書翰は1524年9月3日以後、数日のうちに書かれたものであり、かれがこれを書いたのは、これよりほんの少し前、手にいれたミュンツァーの小冊子を読んで、ここにはからずも発見した同志の存在に、胸の高鳴るのを抑えることができなかつた喜びからであったと思われる。ミュンツァーの新説がグレーベルたちの思想を啓蒙したと思われる点は皆無であり、ただ、多くの点に見られる彼我の思想の符合を見て、巻末でミュンツァーが読者の批判を求め、これにかれが喜んで答える旨を記しているのにはげまされ、同志よと呼びかけずにおられなかった。これが、グレーベルにおける執筆のまことの動機であったと思われる。殊に、この書翰には、第一部の完結について、その直後に追加されたとと思われる第二部がある。この部分の追加は、第一の部分を発信する直前、グレーベルの耳にはいったミュンツァーの暴力肯定主義に対するアナバプティスト派の拒否論を展開しており、

(1) *Der Wiedertäufer Ursprung*, 1550.

(2) *Reformationsgeschichte*, 1572.

(3) *Das Zwinglibild und Züricherischen Reformationschroniken*, 1929

アナバプティスト派がミュンツァーの思想と行動とは別個の起源から発していたことの明らかな証拠となる。

ルッターがアナバプティスト派を夢想的狂信家として斥け、あわせて危険な社会的急進主義者として貶したとき、常に想起して、その代表的人物のひとり、その最大なるものと考えたのがこのトーマス・ミュンツァーであった。かれは聖書を典拠として幼児洗礼を拒否していたから、アナバプティストというニック・ネームで呼ぶひともある。しかし、幼児洗礼拒否者が必ず成人洗礼をうけるとは限らない。成人洗礼をうけたひとが、すでに幼児洗礼をうけていてこそ、かれは再洗礼をうけたといわれる。ミュンツァー自身、成人洗礼はうけていなかったのではないか。かれをアナバプティストと呼ぶことは、だから、決して妥当ではないが、ルッターはこのこまかい区別はせず、ひとしく Schwärmer としてかれを蔑視している。しかし、今日われわれがアナバプティストと呼び、新旧両教会の官許の教会史の裏面に、生きた信仰をもつ信者のみからなるセクトをなし、450年、連綿としてその存在を保持しつづけて来た絶対無抵抗の聖書の平和主義者アナバプティスト派をミュンツァーとその追随者たちと混同することは許されない。何びとも見あやまることのできない相違点は、アナバプティスト派は絶対的無抵抗無暴力主義者であったのに、トーマス・ミュンツァーは社会的平等の貫徹には剣を取って立つことをすらあえて肯定する暴力革命の立場を採っていたことである。かれは事実、農民戦争の精神的政治的指導者として陣頭に立ち、ついに敗れ、捕えられて、首をはねられて死んだのである（1525年）。相違点の第二は、われわれのいわゆるアナバプティスト一派は忠実な聖書主義者で、信仰の最後の根拠をただ神のことばなる聖書においていたのに、トーマス・ミュンツァーはプロテスタント的な個人主義を徹底させて、聖書そのものよりも個人々々の心のうちにささやきたもう神のみたまに、より大いなる権威を認めると説いた点にあった。これらの相違点の存在は、両者が幼児洗礼を否定し、成人洗礼を主張する点で一致していたからといって、これをひとしく同一範疇に属するものと考えるのはただしくない。ルッターが、かれらを夢想的狂信家の枠の内に無差別におしこめて論じたのは、何としても認識不足の非難をまぬがれない。

ルッターにも、コンラットは手紙を書いている。9月3日のヴァディアノ宛の手紙の中で、カールシュタットとミュンツァーとに宛てて手紙を書く

報告したとき、ルッターにも手紙を書くと述べている。1517年10月31日、95箇条のテーゼを発表して宗教改革への第一歩をふみだして以来、すでに8年の歳月を経、『基督者貴族に与うるの書』、『バビロニヤ虜囚について』、『基督者の自由』など、基本的な宗教改革トラクトもすでに出版しており、ルッターの思想はひろく内外に喧伝されていた。1520年12月には教皇の破門状を焼いて不退転の決意を示し、霊界の巨人としてようやくかれはひとびとの畏敬を集めていた。このときに、ルッターに宛てて手紙を書くとすることは、よほどグレーベルみずから期するところがなければ、できることではない。ルッターを脳裡に思い浮べながら、かれが「神の言葉への信頼にささえられて、はげしくぶつつかって行くことになる」だろうと述べているのは、この決意の表現であった。この手紙は失われて、そこに盛られたかれの思想はこれをうかがい知るよしもない。しかし、推測できることは、ルッターを戒めて、政教混淆の邪道からはなれ、正しい聖書信仰にかえることを説いたものであったに違いない。当時、ウィッテンベルク大学の学生であったエルハルト・ヘーゲンワルト(Erhard Hegenwalt)が1525年1月1日付でグレーベルに書いた手紙によると、グレーベルの手紙はルッターの手に渡っていたこと、ヘーゲンワルトの問いに答えて、ルッターは返事を書くつもりはないから、グレーベルとその同志に宜しく伝えてくれと述べていたのである。グレーベルのルッター観はかれのミュンツァーへの書翰の中のルッター批判に明らかである。かれが、端的にルッターの名をあげていない場合でも、福音的説教者と呼んでいるのは、おおむねルッター派の、カトリックに対してみずから福音的とよんでいるひとびとを指しているのであって、グレーベルが福音的説教者たちと自分たちの間に一線を画していることに注意して読まねばならない。

2

トーマス・ミュンツァー宛、コンラット・グレーベルの書翰
ツェーリッヒにて、1524年9月5日、並びにその後、暫くして

キリストにあるわれわれの真実にして愛する兄弟、まことの、そして忠実な福音の宣教師であるハルツのアルトシュテットなる兄弟トーマス・ミュンツァーへ。

われわれの父なる神と、われわれの主イエス・キリストとの平和と恩寵とあわれみとがわれわれすべてのものと共にあるように。アーメン。

愛する兄弟、トーマスよ。

何の敬称も用いずあなたに話しかけ、兄弟にたのむのと同じように、これから後も、あなたが書面でわれわれと意見の交換を行なうことを願い、かつ、これを手はじめに、将来にわたって、あなたと共通の話合いをしようと、われわれは、誰に強いられたのでもなく、またあらかじめあなたの諒解を得もしないで、あえてみずから決心したのである。どうか、神さまのためと考えて、驚ろかないでもらいたい。神のみ子、イエス・キリストは救いにいるべきすべてのもののひとりの師、ひとりの頭として現われ、すべての兄弟と信ずる者と共に与えられた共通のことばを通して、われわれと、そして兄弟をかれにつけるものと仰せられている。そして、かれはまたわれわれをばげまし、われわれにすすめて、友人となり、兄弟となって、次の諸点についてあなたと話しあうようにと仰せられたのである。われわれがこのような気になったのは、あなたが『虚仮の信仰について⁽¹⁾』という二冊のパンフレットを書いているからである。こうしたわけなのだから、われわれの救い主、キリストのために、万事、誤解のないように、宜しく願います。このことがわれわれを益し、さらに一層よいはたらきをするであろうことは、神のみ心なのである。

まことの神と、キリスト・イエスとかれへの正しい信仰についての知識と、まことの、ひとつなる、共通の神のことばと、清純にして神聖なるならわしと、キリスト教的な愛と、キリスト教の本質から、かつて、われわれの祖先たちが脱落していったのと同じように、またかれらが、神も律法も福音も無く、人間的で無益な、非キリスト教的なならわしと儀礼⁽²⁾にしたがって生活し、しかも、これによって至福を獲得できるかのように考えていたのと全く同様に（しかもこれは、福音的説教者がかつて示し、部分的にはいまなお示しているところにほかならぬが、これは、その実、大きな間違いなのである）、今日もなお、偽りの信仰によって、信仰の実もなく、誘惑と試練の洗礼もなく、愛と希望もなくして、しかも救いにはいりたいといっている人が沢山いる。また、おのが悪徳というふるい本性のうちにとじこもり、神のことばを軽んじ、かえって教皇のことばに傾聴したり、反教皇とはいっても、神のこ

[1] “din schriben zweier büchlinen von dem erdichten glouben” 二つのトラクトの名前を明示していない。

[2] これは、カトリック教会の伝統のうちに沈黙した幼児洗礼、その他の sacrament のことである。

とばとは似ても似つかぬ教えを説く説教者たちのことばに耳を傾け、キリストの洗礼と晩餐とをまげて、いたずらに儀式的で、しかも反キリスト的な行事にかえて、これに耽っているひとびともいっばいいる。人間のことや、いろいろの誘惑の問題にも、間違いがある。しかも、それが世のはじめこのかたあった間違いよりも、より重大で、より有害なものが少なくない。われわれが、これら一切の間違いの責任者である福音的説教者のただの聴手であり、読者であったころは、われわれもまた、自分の罪のむくい、このような間違いのとりことなっていた。しかし、われわれが聖書を手にとり、あらゆる点について研究してみると、いろいろよいことを教えられ、牧師やわれわれ自身が犯して来た大きな、しかも有害な間違いを発見した。すなわち、一切の神聖にして清浄な生活を破壊するようなこと、人間的な極悪非道の行ないからわれわれを導きだし、正しい信仰とまことの礼拝にいたらせたまえと、日々、心の底から、不断にあえぎ慕いながら、神に祈り求めることをしていなかったことを発見したのだ。これらのことは、すべて、あやまった考え方、すなわち、神のことばを抑え、神のことばと人間的なことばとを混同することから生じた帰結である。然うだ。ここに一切の害悪の根源があると、われわれはいうのだ。そして、それが一切の神的なものを逆立ちさせてしまうのだと。このことはこれ以上釈明の必要もないし、これ以上ながながと説明するにもおよぶまい。

われわれがこの点に注目し、歎いている恰度そのとき、間違った信仰と、間違った洗礼に反対するあなたの書物がわれわれのところへ送りどけられた。そして、それによってわれわれは一層の啓発と一層の確信とを与えられた。わけても、われわれが非常にうれしかったのは、われわれと共通のキリスト教の見解を持つものがあることを発見したことである。すなわち、福音的説教者たちがあらゆる重要な点で間違ったことをかつ教え、かつ行なっていることを指摘し、神によってつかわされたひとびとならするであろう教えも行ないもせず、かえって、神についてまとめた自分勝手な見解を、否、反キリスト的なひとびとの見解をすらこれをよしとして、神を恐れず、神にさからって主張しているのを見て、勇敢にその誤謬を暴露しておそれない人間がここにいることを発見して、われわれは非常にうれしいのである。それゆえに、われわれは、われわれの主にして救い主なるイエス・キリストによってすべてのキリスト者に与えられた名と力とことばとみ霊と救いとにおいて

兄弟なるあなたにすすめ、かつ願う。どうか、何ものをも怖れず、ただ聖なるみ言のみを説教するようにつとめ、ただ聖なる制度のみを建て、防禦し、判然かつ明白な聖句によって証明できることだけを善にして正しと主張し、あなた自身をも例外なく包含する一切の人間の側からでた一切の計画とことばとならわしと考えとを拒否し、嫌悪し、怖れおののいて離れるよう、努力してもらいたい。

(1)われわれは、あなたがミサをドイツ語に訳し、新しいドイツ語の祈禱書を制定されたということを聞きもし、また見もした。これは何としてもよいことではない。なぜなら、新約聖書には唱歌（や祈禱書）のことなどについて何の教えもないし、ただ一つの例もないからである。パウロは、ユダヤ人やイタリア人たちが自分たちの日常の事柄を唱歌でもうたうような仕方でいい表わしていたのと同じように、コリントの学者たちが歌でもうたっているかのように、教会の集りでささやいていたのを見て、これをほめるよりも、むしろ、随責しているのである。(2)ラテン語で唱歌をうたうことは、神からの教えによったのでもなく、また使徒の実例や模範に従って起って来たのでもない。これによって何かよいことがもたらされたり、うちたてられたりしたのでもない。まして、ドイツ語でとなれば、より一層何の役にもたたないばかりか、皮相的でうわべばかりの信仰をつくりだすだけである。(3)パウロが、エペソ書5の19とコロサイ書3の16で、「詩と讚美と霊の歌とをもて、互に教へ、互に訓戒し、恩恵に感じて心のうちに神を讚美せよ」といって教えたときには、明瞭に歌をうたうことを禁止しているのものであるということをつけ加えておかなければならない。(4)明瞭な聖句、ないしは実例で教えられていないことは、あだかも、そうするとか、唱歌をうたってはならぬと書いてあるのと同じように、これを禁止しなければならない。(5)キリストは、われわれが新旧約聖書の中で見るように、その弟子たちに、ただみ言葉を宣べつたえよとご命じになっているのである。だから、パウロもキリストの言葉がわれわれのうちに住むとはいっているが、唱歌がとはいっていない。下手な歌い方をすれば、自分でもいやになるし、うまく歌えば、ごうまになる。(6)われわれは自分勝手にみ言葉に何かをつけ加えたり、み言葉から何かを抹消したりしてはならない。(7)もしあなたがミサを排除したいと思うなら、それをするのに、ドイツ語の唱歌を用いてそうしようなどと考えてはならない。おそらく、この提案はあなた自身の工夫したものであろう。さもな

ければ、ルッターの考えをもとにして作られたのであろう。(8)ミサの排除ということはキリストのみことばとご命令をもとにしてなされなければならない。(9)なぜなら、ミサは神によってその基盤をすえられたものではないからである。

(10)交わりを共にして行なう聖晩餐はキリストがおはじめになり、基盤をすえたもうたものである。(11)この際、用いられる言葉は、マタイ伝26章、マルコ伝14章、ルカ伝22章、コリント前書11章にあるものでなければならない。それより少なくとも、多くてもいけない。(12)主の群の中から選ばれたひとりの奉仕者〔牧者〕が福音書の記者のひとり、またはパウロにならって、この言葉をみなの前で読まなければならない。(13)それは共同の食事の開始の合図のことばであって、決して祝福のことばではない。(14)それはただのパンであって、偶像や何か付属物がこれにくっついているといったたぐいのものではない。(15)なぜなら、もしそれが後者なら、偽善的な崇拜、パン礼拝といったことになり、したがって、内面的なものからの一步後退ということがおこる。それはまたただの飲食の道具でなければならないのである。(16)これはパン崇拜のようなのを除き、聖晩餐の正しい認識と理解をもたらす。なぜなら、パンはパン以外の何ものでもない。しかし、それがキリストのからだであり、キリストおよび兄弟たちと一つからだになることができるのは信仰においてであるからである。なぜなら、われわれは、ヨハネが第6章およびその他のところで、また、パウロがコリント前書第10章および第11章で示しているように、また、使徒行伝第2章から明らかに学ぶことができるように、み霊と愛とにおいて飲食しなければならないからである。(17)それはただのパンに過ぎないけれども、もし信仰と兄弟の愛が先行しておれば、よろこびをもってうけいられるからである。なぜならば、もしわれわれが教会の中でこれを祝うなら、それは、われわれが真実、一つのパンであり、一つの体なのである。そして、相互に真実の兄弟となることをわれわれに示すにいたるであろうし、またそうなることをわれわれが願っているからである。(18)しかし、もし、そこに、兄弟の交わりを生活にいかすことのできないものがあるなら、かれは飲食することによってみずからにわざわざを招く。なぜなら、かれは他の食事と何の区別もせずして飲食し、愛の内的な紐帯を傷つけ、パンという外的なものまで害うからである。(19)なぜなら、そんなことをすれば、かれはキリストの体と血とを偲び、十字架上で盟約に思いをいたすことを忘れ、つい

にはキリストと兄弟たちのため、頭と肢体とのために生き、かつ苦しむ準備を怠りがちになるからである。(20)また、それはあなた〔ひとり〕が司るべき性質のものであってはならない。ひとが自分ひとりだけで飲食するミサのようなものは、排除してしまったがよい。なぜなら、聖晩餐は信者の群、信者の交わりの一つのしるしであって、ミサでもなければ、聖奠礼でもない。だから、これを自分ひとりでいただくといったことはあるべきではない。たとい臨終の床にあるものであろうが、あるいは別の事情によるものであろうが、そんなことはあってはならない。パンはこれをしまいこんでおいて、ある個人のために保存しておいてよいものではない。なぜなら、何びともおのれ自身のためにのみ、共同のパンをとってはならないからである。そんなことをすれば、かれは自分自身と仲たがいになってしまうだろう。(21)あらゆる記録とあらゆる歴史からみて、聖晩餐はまた『寺院』の中で祝われるべきものではない。なぜなら、そんなことをすれば、間違った畏敬の念をつくりだすことになるからである。(22)聖晩餐を祝うのはたびたび数多くした方がよい。(23)聖晩餐を守るにはキリストの規則（マタイ伝18の15—18）を無視してしてはならない。もしこれに反すれば、主の聖晩餐とはいえない。なぜなら、これを無視すれば、ひとはついに外的なものに走り、内的なもの、すなわち愛を忘却し、悪い兄弟がこれに加わり、あるいはこれを飲食する。(24)だから、もしあなたが聖晩餐を司るようなことがあるなら、坊主の衣やミサの制服を着ないで、唱歌もうたわず、余分なことは何ひとつ付け加えずにしてもらいたい。これこそ、われわれの望むところである。(25)一日のうち、いつこれをするかということについていうなら、キリストが使徒たちにこれをお与えになったのは晩餐のときであった。またコリント人も同じようにこれを守っている。われわれのところでは、別段、時間をきめてこれを守るということはない。

さて、あなたは主の聖晩餐についてははるかによく精通しておられることでもあり、われわれはただわれわれの見解を申しあげただけである。もし、われわれに正しくない点があれば、教え正していただきたい。ただし、唱歌とミサはやめ、すべてのこと、ただみ言葉にしたがい、み言葉によってとり行ない、使徒たちのならわしを明らかにして、これを実行に移してもらいたい。もしこれができないなら、むしろ、一切、手をつけず、ラテン語のままにしておき、変更も妥協もしない方がよい。もし、正しいことの導入が不可

能なら、あなたひとりだけの考えや、坊主たちの反キリスト的ならわしに従って聖晩餐をとり行なうことをせず、それがいかがあるべきかということについて、その最少限を教えた方がよい。キリストがヨハネ伝第6章でなさっておられることはまさにこの通りである。すなわち、かれは、いかにわれわれがキリストの肉を食ひ、キリストの血を飲まなければならぬかということをお教え、少しも背教者たちのことを顧慮せず、反キリスト的な思いやりに墮することを極力警戒したもうた。このような配慮を欠いたために、かのはなはだ博学にして、福音的な、第一線級の説教者たちは、正真正銘の偽神をつくりだし、これをあまねく世の中におしひろめるにいたったのである。少数のひとびとが神のみ言葉によって正しいことを教えられ、正しい信仰を得、正しい徳とならわしを身につけて暮すことは、多くのひとびとが謬った教えのために誤謬と欺瞞に満ちた信仰をもつよりははるかによい。われわれがあなたに注意し、お願いしているにもかかわらず、あなたは、思うに、ただ自分の止むに止まれぬ気持ちからそうなさっているのであろう。あなたがわれわれの兄弟〔註 Hans Huiuff aus Halle〕のいうことに親切に耳を傾け、かれのいうことをうけいれて下さったから、愛のゆえに、われわれはあなたに注意する。あなたは少し多すぎるくらいに譲歩なされているのではないかと。あなたとカールシュタットとはわれわれのところでは寸分もまじりけのない宣教師にして、正純にして神的なことばの説教者として尊敬されているのであるから、このように注意せずにはいられないのである。もし、あなたがたふたりが、人間のことばとならわしとを神のことばとならわしと混淆するようなひとびとを正しいというなら、しかも、それが正しいことであるかのように考えていっているなら、あなたがたは、坊主気質、寺祿、あらゆる新旧のしきたり、旧思想、あるいは自分のむかしながらの考えなどからはなれ、完全に純粹にならなければならない。もしも、あなたがたの寺祿が、われわれのところでもうであるように、貢物や十分の一税（共に、正真正銘の不当の利息である）をもととして成立しているなら、また、あなたがたが信者の群すべてのものによって支えられていないのであったら、どうか、寺祿をとることなど、断然やめてもらいたい。牧者がいかにして生を保つべきものか、あなたはよくご存知でしょう。

われわれはヤコブ・シュトラウス (Jakob Strauss〔註 アイゼナッハの説教者にして、暴利反討論を著わす〕) その他のひとびとから多くのよいことが生まれ

て来ることを期待しているが、ウィッテンベルクの冷淡な学者、博士たちはかれらに全然注意を払っていない。われわれもまた、われわれの博識な牧者たちの非難の的となっている。すべてのひとびとがかれらに追隨してゆくのは、かれらが罪びとに甘美なキリストを説教し、かれらが正しい判断を下すことの妨げをするからであるが、このことをはっきりわれわれに教え、われわれ、心貧しき者を異常なくらいゆたかにし、強めてくれたのはあなたのパンフレットである。そして、われわれは、一切のことにおいてあなたと見解をひとしくするものであるが、ただ、われわれが大変残念なこととしてうけとったことは、あなたが、新約のどこにも典拠も実例もない道德碑を導入していることである。なるほど、形のうえではそれは旧約の中に書いてあるかも知れない。しかし、現在、新約によってみれば、心の肉碑の表の中に書かれたものと考えられるべきものである。このことは新旧両約聖書を比較してみれば、よくわかる。たとえば、パウロ（コリント後書3の3）とエレミヤ（31の33）、ヘブル書（8の10）とエゼキエル（36の26）とを比較すれば、わかる。もし、われわれのいうことが謬りでないならば（われわれは謬りであるとは考えていないし、信じてもない）、どうかそんな碑は破棄してもらいたい。このことは、自分勝手な考えから起って来たことであって、まったくむだなことである。しかも、このことはそっとしておけば、どんどん増し加わり、完全に偶像的になり、世界中にひろまって、ちょうど偶像崇拜とおなじような現れ方をする。聖書の実例や命令、たとえば、特にコリント前書14の16、およびコロサイ書3の16が明らかに示しているように、外的な言葉〔異言を内的な言葉と考え、これに対し、ひとびとの理解できる外なる言葉〕が用いられなければならないということはたしかである。しかし、無学なひとびとがこれによって学びとることができるために、どんな場合にも、外的な何か、偶像にかかわって導入される必要があるかのようにいうならば、これはまた必ずしも正しい考え方とはいえない。このように、み言葉からのみ学ぶということが、時のたつにつれて、少しずつ難かしくなることはあり得ることであろう。しかし、もし、かりに何の害をも伴わぬものならば、しいてわたくしは新しいことを工夫、導入して、誤謬だらけの思いやりから、ひとびとをあやまらせがちな学者にならぬ、そのいうところに賛同したり、また自分勝手な考えから何ごとかを工夫し、教え、導入するようなことは、すべてしたくない。

(神の)み言葉のあかしびととおなりなさい。そして、マタイ伝18の15—18において示され、パウロたちの書翰中に用いられているのをわれわれが見て知っているかのキリストのおきてと、キリストご自身のおん助けを得て、キリスト教的な信者の群をつくりなさい。みずから良心に恥じないようにしなさい。命令や強制にうったえず、信仰と愛のはかりに従って、共に祈り、節度をお守りなさい。そうすれば、神はあなたとあなたの仔羊たちを助けて至純の境地に導いて下さるであろう。もし、そうなれば、唱歌だとか、碑だといったものはおのずからにすたれてしまうであろう。聖書の中には、一切の階層と一切の人間を教え、支配し、導き、敬虔にするにはいかにすべきかを教える智慧とすすめとが十分すぎるくらいみちみちている。しかし、自分自身よくなろうと思わない人、信じようとしなない人、神のみ言葉とみ業とに逆う人があった場合はどうするか。たとえばそのひとに、キリストとそのみ言葉とキリストのおきてとが説きあかしされて後、すなわち、かれが聖書にあるように人の証人のいうところにも従わず、教会にも聞かないで、依然としてもとのままで、その行動に固執してかわらない場合には、(神のみ言葉にしたがって)われわれはいう。その人を殺してはならないが、異邦人、または取税人のような者と同様に取扱い、放任しておくがよいと。

ひとは福音とこれを信ずる者を護るのに剣を用いてはならない。また信ずるものは決してみずからそんなことをしてはならない。われわれの兄弟ハンスから聞くところによれば、あなたもまた同じ意見、同じ態度をとっておられるということである。正しい、そして信仰深いキリスト者は狼の群の中の羊であり、屠所にひかれる羊である。不安と欠乏、艱難と迫害、苦難と死のバプテスマを受け、火の中で試みられながら肉体の敵の殲滅によらず、精神的な敵の殺戮によって永遠のいこいのふるさとを発見しなければならない。かれらはこの世的な剣を用いず、戦争にうったえない。なぜなら、信者の間では、殺すということは完全にあるべきことではないからである。ただ、われわれが古い律法に属していた時代、すなわち、旧約聖書の中では(われわれの記憶するところでは)、戦争はあった。すなわち、約束の国を獲得した後には、これはひとつの災害にすぎぬものと考えられるようになった。今日では、戦争はあってはならない。

洗礼のことに関する限り、あなたの著作はわれわれの心をとらえる。より多くのことをあなたから学びたいものだと思う。われわれの理解にしたがえ

ば、成人であっても、つなぐことと解くことについての規則〔マタイ伝16の19〕を無視してする洗礼はゆるされない。聖書は洗礼について記し、これを、おのが心をいれかえ、信じて洗礼をうけたものは、その罪が信仰とキリストの血とによって、ぬぐいさられてしまうということを表現するしるしであるという。また、それはひとが罪に死んだということ、死ななければならないということ、そして、生命と魂とを新たにして、今から生きてゆかなければならないということ、そして、もし、かれが内的なバプテスマをうけて、信仰の独自の意味を生活のうちに生かしきることができれば、必ず祝福されるということを示すしるしであるという。ウィッテンベルグの学者たちがいうように、水は信仰を堅うしたり、増し加えたりはしない。また、臨終の床にあるものにとって、決して、非常に強力な慰めとなるものでもないし、最後のかくれ家となるものでもない。また、アウグスティヌス (Augustinus)、テルトゥリアヌス (Tertullianus)、テオフィラクトス (Theophylaktus)、キプリアヌス (Cyprianus) たちが教えているように、洗礼そのものが救いをもたらすということとはあり得ない。かれらはその教えによって、成人に対しては信仰の価値を傷つけ、キリストの苦難を信じるに足らぬものとし、洗礼をうけていない幼児たちに対しては、キリストの苦難のもつ意味を軽くあつかりに傾いた。(創世記8の21、申命記1の39、30の6、31の13、コリント前書14の20、箴言12の19、ペテロ前書2の2、ロマ書1章、2章、7章、10章、マタイ伝18の1—6、10章、19の13—15、マルコ伝9の33—47、10の13—16、ルカ伝18の15—17等々の聖句にもとづいて)、われわれは、まだ善悪の本質的差別を知らず、智慧の木の実をたべていないすべての子供たちが、新しいアダムなるキリスト、すなわち、これら子供らに、軽率にも亡失したその生命の再獲得をさせて下さったキリストの苦難によって、確実に救われ、至福の道にすすむことができるということを知っている。なぜなら、もし、キリストが苦難をおうけにならなかつたならば、かれらは、ただ死と呪いの下にとじこめられているよりほかはなかつたからである。かれらは、われわれ墮落した人間の性質にしたがって罪を犯すほどにまだ成長していない。—それなればこそ、キリストは子供らのためには苦難をおうけにならなかつたということも証明できるのだ。もし、われわれが、これに対して、信仰は、ただ救いを望んでいるすべてのひとびとに対してのみ要求せられているというなら、われわれが子供たちを別あつかいにして、子供たちは信仰なくとも救いに入る

ことができると思うのは当然であろう。そして、上記の聖句を根拠にして、かれらの信仰を云々する必要はあるまい。(幼児洗礼禁止の)洗礼論、および諸報告を根拠に、しかし、また上述の諸聖句をもとにして(そのうちのいくつかは幼児洗礼についてであり、ほかのはすべて子供のことにはふれていない)、われわれは、幼児洗礼は不合理にして、神を冒瀆する非道の行為であり、聖書に反し、また教皇制にも反するという結論を引きだしている。なぜなら、われわれは、使徒の時代以後、キプリアヌス、およびアウグスティヌスの時代をはさむ600年という長い年月にわたって、キリスト者も、非キリスト者もおたがいに『おのが信仰の告白にしたがって』洗礼を授けられていたことを発見する。あなたはすべてそれらのことを十倍もよく知っており、幼児洗礼に対するあなたの抗議を公けにしている。願わくば、あなたが、ただ信じるものみに洗礼を施し、子供らに洗礼を授けてはならないという永遠のみ言葉と神の智恵と命令とにそむいて行動しないように望む。

もし、あなたとカールシュタットとが幼児洗礼に反対して余すところなく、いかに、そして何故に洗礼をなすべきものかなど、およそこれと関連するあらゆる点をとあげて書くことをしないなら、わたくし自身(コンラット・グレーベル)、わたくしの運命を賭してこれにあたろうと思う。そして、わたくしは(あなた以外のたとえば、ルッター、ロェーヴ [Löw=Leo Jud, ツェーリッヒの牧師]、オシアンダー [Andreas Osiander, ニウルンベルグの牧師]、およびストラスブルクのひとびとなどが、今日までに、一知っていながら故意に、洗礼について人をあやまらせるような教えを公けにし、幼児洗礼の無意味な、冒瀆的な形式をドイツ化し、一中には、書いただけで満足せず、恥さらしにもこれを実際に行なっているもののあることを知っている。わたくしはかれらにあくまでも反対し、事こまかにこの反論を展開する仕事をすずではじめている。もし、神のみ心によってこれらのことに変化が来ないなら、わたくしは、今日も、またこの後も、われわれすべてのものとともに、学者、ならびにその他のひとびとの手によって迫害されることは必定のことと思う。願わくば、あなたが、 sacrament やミサや偶像などのような古い反キリスト者たちの習慣を用いたり、承認したりしないで、ただみ言葉のみ従い、すべて、神によって遣わされたすべてのひとびと、わけてもあなたやカールシュタットに特にふさわしく、神のみことばに従って行動なさらんことを。あなたがたは、あらゆる国民のあらゆる説教者よりはるかに秀れた

ものであることを自覚して、行動してもらいたい。

どうかわれわれをあなたの兄弟と考え、われわれのこの手紙を、神の名においてわれわれがあなたがたに対していただいている大きな喜びと望みとのしるしであると解釈してもらいたい。どうか、あなたにできるかぎりの力をつくして、われわれに注意を与え、われわれを慰め、われわれを強くしてもらいたい。われわれのために主なる神に願い、主がわれわれの信仰に援助の手を貸して下さるよう、祈ってもらいたい。なぜなら、われわれのもっとも欲しているものは、ただ信仰だからである。そして、もし、神が、われわれに恵みを与え祈ることを許したもうならば、われわれはあなたのために、またすべてのもののために、われわれすべてのものが、われわれの召命と立場にしたがって生活するよう、お願いしたい。われわれの救い主、イエス・キリストによって、神がわれわれをさきわい、このことをなすことのできるよう、導きたまわんことを、アメン。

信仰と救いの言葉を貪欲と思われるほどの熱心と飢えとをもってうけいれているすべての兄弟たち、すなわち牧者と子羊たちに、われわれの名において安否を問うて下さい。

最後になお一つ。われわれはあなたの返事の来るのをまっている。もしあなたが何か公刊なさっているものがあつたら、それを、この使いの者に托し、あるいはほかのものをつかって、われわれのところへとどけて下さることをお願いする。もし、あなたとカールシュタットと同じ意見であるならば、そのことも是非知らせてもらいたい。われわれはそうだと思い、そうあってほしいのである。この使いの者は、われわれの愛する兄弟、カールシュタットにもわれわれの手紙をとどけるために持参しているが、どうかかれを宜しくうけいれていただきたい。もし、あなたがカールシュタットのところへ出むいて行って、あなたがたがふたり一緒になってわれわれ宛ての返事を書いて下さったら、それはわれわれにとって心からなる喜びである。使いの者はわれわれのところへ帰って来るはずである。かれにはまだ十分支払をしてはいないが、帰りついたときに、不足の分は支払うことになっている。

神よ、われわれとともいたまえ。

われわれが正しい理解をもっていない点があつたなら、その点について、われわれに知らせ、教えてもらいたい。

日附一ツェーリッヒにて、1524年収穫の月〔註9月〕5日。

あなたへのこの手紙を書いたコンラット・グレーベル、アンドレアス、カステルベルク (Andreas Kastelberg), フェリックス・マンツ, (Felix Mantz) ハンス・オツゲンフス (Hans Oggenfuss), パルトリーヌ, プール (Bartholime Pur), ハイリッヒ・アベルリ (Heinrich Aberli), および, (神のみ心ならば), キリストにあってあなたの兄弟なる他のすべてのものが, あなたと, われわれすべてのものと, あなたのすべての子羊たちのうえに, この次の手紙を書くときまで, 神のまことの言葉と, 真実の信仰と愛と望みとが, あらゆる平和と, あらゆる恩寵とともにイエス, キリストを通し, 神によって与えられんことを心から望んでいる。アメン。

わたくし, コンラット・グレーベルは, われわれすべてのものの名においてルッターに手紙を書き, かれが聖書の根拠にもとずかずして説き, 世の中にひろめ, かれ以後のひとびとの拠りどころとして主張しているいたわり〔寛大〕の説をやめるよう, かれに注意したいと思ったことがある。しかし, わたくしが日々直面している苦難のために, また, そうする時間がないために, それはできなかった。願くば, あなたたちにそれをしてもらいたい。それはあなたたちの義務である。

次の手紙は, また, ハルツのアルシュテットなるトーマス・ミュンツァーに属する。

親愛なる兄弟, トーマスよ。

ルッター宛ての手紙を書こうと思っても, 飛脚はとでも待ってはくれまいと思ったので, 大急ぎで, みんなの名であなたへの手紙を書いたが, かれは雨のために, とどまって, 待っていなければならなかった。そこで, わたくしは, わたくしとはほかのもののために, すなわち, わたくしやあなたの兄弟たちのために, ルッターにも手紙を書き, 弱いもの (かれら自身弱いものである) のためになまじい寛大な態度をとることを止めるよう, かれに注意した。アンドレアス・カステルベルクはカールシュタットに手紙を書いた。そうこうしているうちに, この町の住人で, われわれの同信の兄弟であるハルツ生れのハンス・フィウフ, すなわち, つい最近, あなたのところにいったことのあるあのフィウフが一通の手紙と, それに添えて一冊のルッターの書いた醜悪なパンフレット⁽¹⁾とをうけとった。このようなパンフレットは, 使

徒たちのように初穂となろうとしているひとなら、何びともあえて書こうとしないようなたぐいのものである。パウロはこれとは違った教を説いて、「主の僕は争ふべからず」（テモテ後書2の24）といっている。わたくしの見るところでは、かれルッターはあなたを斧鉞の下において、アロンがモーゼを神としなければならなかったときとおなじように、自分の福音にしばりつけてしまった諸侯のところへ、あなたを引渡してしまおうとしているのである。あなたのパンフレットと抗議に関するかぎり、あなたには何の罪もない。あなたが洗礼をびんからきりまで完全に非難しているのでなければ、罪はないはずである。その抗議の中からこのことを推察することは困難であるが、ただあなたは幼児洗礼を非難し、洗礼のあやまった解釈を弾劾しているのであろうと思う。ヨハネ伝第3章の水が何を意味しているかということについては、あなたのパンフレットならびに聖書の中をよく見て、十分に研究してみたいと思う。

兄弟のフィウフは手紙の中で、あなたが諸侯反対の説教をし、われわれは諸侯を握り拳で撲りつけてしまわなければならないと説いているようにいっている⁽²⁾。それははたしてほんとうのことなのだろうか。もし、あなたが戦争を是認しようとしているのであるなら、また、はっきりした言葉であなたが基礎づけしているように思えない諸点、たとえば碑のこと、唱歌のこと、その他の事柄についてその支柱となり、根拠となるべきものを発見しない場合にも、これをあえて弁護しようとして、牽強附会の説をたてるならば、われわれはすべてのものの救いのために、あなたに注意しておきたいと思う。そんなことは止めてもらいたい。よくよく考えて、今も、またこの後も、どうか止めてもらいたい。もし、そうしてもらえるなら、あなたは完全にしみなく、純粹なものとなれるであろう。そして、そのときこそ、あなたは、他の点においてもまた、ドイツ国内のみならず、他の国々においても、だれよりもすぐれて、尊敬に値いするものとしてわれわれの眼にうつるであろう。もし、あなたがルッターや大公のところに捕われの身になって現われるようなことがあったら、上述の諸点をことごとく放棄してしまいなさい。そうす

(1) これは1524年、ウィッテンベルクで公開された『暴動的精神についてザクセンの諸侯に与える書』“Ein Brief an die Fürsten zu Sachsen von dem aufrührerischen Geist” 全集15巻199—221頁のことである。

(2) トーマス・ミュンツァーがアルシュテット城内で諸侯を前にしてなした説教

れば、あなたは、ほかのひとびとには、神の英雄にして戦士としく堅く立つものとなる。強くなりなさい。あなたは聖書をルッター的な偽神の寛大さに抵抗するために必要不可欠な擁護物として持っているのである。(ルッターは聖書をかえてブーベルとし、パーベルとした⁽¹⁾)。あなたは、ルッターと、われわれのところの博学な牧者たちが世の中のすみずみにまでおしひろめたこのあやまった寛大の説に反対し、人を欺き、あってもなくてもよいような信仰に反対しキリストを説くにふさわしい仕方でキリストを教えない説教に反対するために、あなたは聖書を持っているのである。ルッターたちは、なるほどその説教の中で、世のすべてのひとびとにむかって福音を示し、みずから読み、また読むべきものとして説いたけれども、これを実行しているものは少ない。なぜなら、だれもがたよりにしているのは人間であるからです。この地方には、神のみことばを信じているひとは20人もいない。みんなが信じているのは、ツウィングリヤローヴ、その他、ほかで学者として尊敬されている人間だけである。そして、そのためにあなたが苦しまなければならないとするなら、それも止むを得ないということを、あなたはよく知っているはずである。キリストは、いまなお、かれに連らなる肢体のうちに多くの苦難を経験したまわなければならない。しかし、かれは、終りにいたるまで、かれらを強め、かたく保って下さるであろう。願わくば、神よ、あなたのうえに、そしてまたわれわれのうえに、恩寵を与えたまえ。なぜなら、われわれの牧者たちもわれわれに対して、大変おこっており、憤怒のかたまりのようになっているからである。かれらは公けの説教壇からわれわれを罵り、悪者とよび「光の天使にすがたを変えた悪魔」だという。また、われわれは、時がたつにつれ、かれらの迫害がわれわれの身にもふりかかって来ることを体験するであろう。だから、われわれのために、神に祈ってもらいたい。

いま一度、われわれはあなたに勧告の言葉をお伝えする。われわれはあなたの言葉の明瞭さのゆえに、あなたを心から尊敬し、かつ深い信頼の念をもってあえてあなたに手紙を書く。たとい、それが自分の考えであろうが、ほかのひとの考えであろうが、人間中心の考えで、行動したり、教えたり、何かを導入したりすることはやめてもらいたい。もし、何ごとかそうしたものを導入したことがあるなら、そんなものはすぐ廃止したらよい。これに反して、

(1) 聖書はドイツ語で Bibel, それは Babel, Babel に通ずる。バベルは混乱を意味する。

ただ、明らかな、神のこゝばを教え、これにふさわしいならわしだけを、キリストの規則と正しい洗礼と正しい聖晩餐とともに導入して下さい。(このことについては、最初の手紙で申しあげたし、あなた自身、われわれよりも百倍もよく知っているはずである。)なぜなら、もし、あなたとカールシュタット、ヤコブ・シュトラウスとミハエル・シュティーフエル (Michael Stiefel [註 ルッター派の牧師、後にイエナで数学の教授となる]) などが、あのようにひどくせっかちに全力をあげてそのことにうちこむようなことをしなかったならば、おそらくは、この苦難に値いする福音も世にひろまっていったはずである。しかし、悲しいことには、実際にはそうならなかった。(わたくしも、わたくしの兄弟たちも、あなたたちがそうするようになるにちがいないと信じ、これを望んでいる。)しかし、あなたたちは、ここにいるわれわれよりも、また、聖書を倒錯させて反対のことを教え、盲目のためにさらに大きな倒錯に日々陥っているウィッテンベルクのひとびとよりも、はるかに純粋である。わたくしが信じ、かつ考えていることは、かれらがなりたがっているものは、まことの教皇派と教皇なのだということである。このことについて、いまこれ以上書くことをやめる。主なる神が、そのみ子、われわれの救い主なるイエス・キリストとともに、またそのみ霊とみ言葉とともに、あなたとわれわれすべてのものとともにあらんことを。

コンラット・グレーベル、アンドレアス・カステルベルク、フェリックス・マンツ、ハインリッヒ・アベルリ、ヨハネス・パニツェルス (Johannes Panicellus [ツューリッヒ近傍のツォリコン村の牧師、プロェトリ Johannes Brötli のこと])、ハンス・オツゲンフッス、ハルレ生れのあなたの同国人なるハンス・フィウフ。すなわち、ルッター反対のあなたの兄弟にして、新しい、若いミュンツァーにほかならぬ7人のものより。

さて、今後、つづけて説教することは、あなたの自由であり、何もその障害となるものはないはずである。ルッターにあてて書くわれわれの手紙の草稿と、かれがそれに答えてわれわれに書く返事はいずれお目にかかることとする⁽¹⁾。われわれはかれにすすめをなし、また、ここにいるわれわれの側のものにも注意を与えた。もし、神のおん助けさえなければ、われわれはこれによってかれらの欠点をひとびとの眼に見えるようにしたい。それがために

(1) このルッター宛の手紙はルッターにとどいたが、ルッターはその返事を書かなかったというのが、通説である。

どんなことがおころうが、恐れはしない。われわれは、つねには、手紙の草稿など保存したことがなかったが、あなたの反対者、マルティン（ルッター）にあてて書いた手紙の草稿だけは特にとっておいたのである。それゆえに、われわれの浅学、非才のこの書翰を心よくうけとって頂きたい。そして、これを書いたのは真実の愛からでていることを信じてもらいたい。なぜなら、あなたが精神において、われわれよりも強く、学問もあるにはちがいないが、われわれはお互いに、言葉において、また攻撃と反対とにおいて共通の点もっているからである。この共通性のゆえに、われわれは、このように多くのことを、あなたとともに話したいと思い、あなたに手紙を書いたのである。神のみ心ならば、あなたのもとにあるキリスト者たちにわれわれの挨拶をつたえてもらいたい。そして、われわれすべてのものにあてて長い手紙を書いてもらいたい。あなたはわれわれに大きな喜びと、あなたへの増し加えられた愛とをよびまましてくれるであらう⁽¹⁾。

3

この手紙は、その長さにおいても、また思想内容においても、単なる書翰という域をこえて、ひとつのトラクト、ないしパンフレットと見て差しつかえない。アナバプティスト派最大の指導者、コンラット・グレーベルにかれの体系的思想を十分に伝えるに足る著述ひとつないことを知るわれわれは、このミュンツァー宛ての書翰の意義を人一倍感じないわけにいかないのである。この観点に立って、これよむとき、われわれにそくそくとして迫って来るものは、そのうちに、アナバプティスト派の思想の根幹となったものが、ことば少ない表現によってではあったが、はっきりいいあらわされていることである。

第一に、年令においても、神学的訓練においても、また、社会的な活動と

(1) この書翰のドイツ語字版は C. A. Cornelius, 1860; Christian Neff, 1925; H. Boehmer und Paul Kirn, 1931; L. von Muralt und W. Schmid, 1952; Heinold Fast, 1962. 等がある。本書では、ファストによって訳出した。英訳では、Walter Rauschenbusch, 1905; George H. Williams, 1957. がある。後者はラウシュンブッシュの改訂である。1970年に、ゴーンセン大学のウェンガーが、原典の写真版とドイツ語活字版と英訳をだしている。

評価においても、トーマス・ミュンツァーは、スイス・ブレズレンなどと比較してはるかに先輩であった。それにもかかわらず、コンラット・グレーベルが、少しも卑屈にならず、兄弟と呼びかけるのを許してもらいたいといっていることがめだつ。あなたの二冊のパンフレットを読んで、大いに共感するものがあるから、その書の巻末に付けられているあなたのすすめに従って、あえてここに一書を呈するというのである。この書翰は、結局、ミュンツァーの手にはいらず、返書はもらえなかったが、グレーベルたちの気持ちでは、あの純粋なミュンツァーが手紙を取りっぱなしにすることはないという信頼感もあって、ついに長い手紙となったのであろう。

あなたは純粋だというときに、グレーベルは、ルッターたちとくらべて、「聖書を倒錯させて反対のことを教え、盲目のためにさらに大きな倒錯に陥っているウィッテンベルクのひとびとよりも、はるかにあなたは純粋である」といっているのである。宗教改革的思想において、ツウィングリと50歩100歩のルッターに対してはまるで信頼感を持たず、上記のことばにつづく節でも、「かれらがなりたがっているものは教皇派と教皇なのだ」といって非難している。このほか、「ウィッテンベルクの冷淡な学者、博士たちに…、みんながついて行くのは、かれらが罪びとに甘美なキリストを説教しているからだ」といって、*sola fide*の神学によって、安価な恩寵をルッターが説いていることを非難し、ルッター派の「信仰の弱いもの」に対する「いたわり」の心はひとびとを甘やかすものだといつて斥ける。これは、「聖書に帰れ」と叫んで宗教改革を起しながら、*Bibel*をかえて、*Babel*にしているルッターの許すことのできない罪だというのである。なかなか辛辣な非難であるが、ミュンツァーのルッターに対する罵詈雑言にくらべれば、何でもない。

神学的に積極的な主張になると、幼児洗礼否定という基本でミュンツァーと若干一致するものがあるが、また一致しないものも少なくない。この書翰の全体を支配する基本的な調子は、この基本的な点に見られる一致点の存在によって醸しだされた信頼感から、不一致な点を率直にあげて有能な闘士ミュンツァーの反省を求め、かれをアナバプティスト陣営に獲得したいという宣教者のそれであった。

ハロルド・S・ベンダー (Harold S. Bender) が1950年代の初め、アナバプティスト派の研究に沈潜して、トーマス・ミュンツァーをその圏外におしだ

すまでは、アナバプティストといえ、すぐミュンツァーを想起するのが世の常識であったが、それはかれが、ルッターの国教会的方向から帰結された幼児洗礼の慣行の踏襲に強く反対したためであった。しかし、かれは幼児洗礼の反聖書性、信仰自覚のない幼児の洗礼の無意味性から、その否定を説くには説いたが、アナバプティスト派にならって再洗礼の形で成人洗礼を実施するところまで踏みきってはいなかった。しかし、グレーベルはこの幼児洗礼否定という基本点での一致ということを出発点にして、アナバプティスト教会の信仰簡条として定着するにいたった諸点を列挙して、ミュンツァーの反省を求めているのである。すなわち、グレーベルたちが宗教改革的福音主義から伝承し、しかもより厳密に固執した聖書主義すなわち、*sola scriptura* の主張が第一にあげられる。「ルッター的な偽神の教えに反対するために、…あなたは聖書を持っている」のであるから、これに堅く立って真の道を教えなさいといった。しかし、これは神秘主義者タウラーの研究を出発点とし、ツウィコウのニコラス・シュトルヒ (Nicholas Storch) たちのスピリチュアリズムを思索の根幹としたミュンツァーには、たとい手紙がとどいても、通用しなかったろう。また、ミュンツァーがカトリック教会のラテン語のミサを廃止して、ドイツ語のそれにとりかえたことなども、ミサ廃止の真精神と合わないから、これは止めた方がよいという。そして、祈禱文の斉唱や、讚美歌なども聖書にないことだから、教会の礼拝にもりこんではいけない。ミュンツァーが独自の工夫として自負していた十誡の碑を教会におくことも偶像崇拜に墮する危険があるから、とりやめるに如くはないという。

ミュンツァーが、グレーベルがここにいつているラテン語の典礼のドイツ訳をした動機は「魔術師がやるように、ラテン語に何か功德をもたせようとしたり、貧しい民衆が、教会にはいつて行くときよりも、はるかに無知になって教会が出て来るようにすることはもはや許されない⁽¹⁾」という教育的な観点に発していたことは疑えないが、それがミサ否定の精神と矛盾することを指摘したのがグレーベルであった。グレーベルがミュンツァーに訴えたときには、それはすでに、『ドイツ教会典礼』、および『ドイツ福音ミサ』という名で印刷され、ドイツの多くの都市に行きわたっていたといわれる。

ミュンツァーとアナバプティスト派との相違点で、何びとも看過し得ないのが、ミュンツァーの暴力肯定の立場とアナバプティスト派の聖書的絶対無

[1] ベンジング著『トーマス・ミュンツァー』邦訳、48頁。

抵抗主義への固執ということであった。書翰では、「兄弟ハンスから聞くところによれば、あなたも〔剣の問題では〕また同じ意見、同じ態度をとっておられるということである」がといているが、間もなく、フィウフの手紙で、ミュンツァーが反対派の諸侯をにぎりこぶして撲りつけてしまわなければならぬといい、戦争を是認しているという報告をうけて、驚いて第二の書翰でこのことに言及し、むしろ、暴力を否定して神の英雄になれといている。ベンジングのミュンツァー伝でも明らかなように、ミュンツァーは、坊主や諸侯の貪欲と狡猾なのを見ると、剣によってこれと戦わなければならぬとしばしば言明している。しかし、かれが血に飢えた狼のような暴力主義者でなく、よし剣をふるうような場に立たされても、できるだけ流血の惨は回避しようとしたキリスト者であったことも忘れてはならない。ベンジングによると、1524年の9月中旬、ミュールハウゼンの貧民と小市民の連合勢力は「神との永遠同盟」を設立し、軍事組織をつくり出し、ミュンツァーが起草した「ミュールハウゼン11箇条」によって独自のプログラムを持つことになった。かれはこれによって、この町の改革を断行したのであるが、この場合もできる限り平和的な現状変革を企図していたという。また、農民戦争の前夜の、戦雲たなびく非常の際など、「断乎たる戦いを主張しながらも、この戦いができるだけ流血と武力なしに最後まで戦い抜かれることを望んでいた」という⁽¹⁾。

アナバプティスト派は絶対に無抵抗といい、ミュンツァーは、正義を貫くには、ときに剣もやむなしといたしたのである。一方はあくまでも聖書に準拠してその立場を正しと主張したが、他方は、現実の危機に直面したとき、心の深奥のところにはささやきたもうみ霊の声に聴従して去就を決するという。このときにも、われわれは、「すべて剣をとる者は剣にて亡ぶるなり」（マタイ伝26の52）というイエスのみ言葉をかみしめ、ひろく世の興亡を考えることによって、アナバプティスト派とミュンツァーの立場の是非を今一度反省してみなければなるまい。

礼拝に唱歌を用いることを、グレーベルが強硬に反対していることは、現在としては、むしろ、おかしいくらいである。しかし、かれの聖書主義的立場の真面目から見ると、必ずしも笑えないものをわれわれはそこに見る。かれは、聖餐式のパンは聖書にはどう記してあるかとか、どこで、いつ行なわ

(1) ベンジング著『トーマス・ミュンツァー』邦訳、67頁、79頁。

れねばならないかなど、実に杓子定規だといいたいくらいに、聖書主義をか
つぎだす。あの歴史の時点で、聖書主義を奉戴して支配者とたたかうには、
あれほどの厳密さが必要であったのだという解釈はあたらなだろうか。

教会での唱歌のことでは、今日でも、アナバプティスト派の中の右派のア
ーミッシュ派と、左派のフッタライト派とは、そして中間派のメノナイト派
の一部では、教会での楽器の使用を禁止しており、讚美歌も楽器を用いず、
ただ斉唱だけにとどめている。しかし、かれらの間には、讚美歌の創作はさ
かんであり、それも集会の席上で斉唱、ないし合唱するためであった。グ
レーベルの音楽否定は、今日の教会の礼拝形式のうえから見て、何かびったり
しない。聖書主義と聖書解釈の問題は、なお多くの考えなければならないも
のを含んでいることは否めない。

附 記——1970年に、ゴージェン大学の Prof. J. C. Wenger は “Conrad Grebel's
Programmatic Letters of 1524.” という小冊子を出版した。ドイツ語原
本の全文を写真版でとったのに活字版と英訳が添えてあって、研究上、非
常なたすけとなる。

Aspects of the Acquisition Process of Grammatical Rules of English — A Case Study of English-Japanese Bilingual Children —

Kohei FUNATSU

This paper deals with some aspects of the acquisition process of grammatical rules of English in three English-Japanese bilingual children between the ages of 5 and 6. The main part of this study is concerned with the analysis of the grammatical errors English-Japanese bilingual children tend to make while they are on the way to acquiring the basic grammatical rules of English. The errors are analyzed on three linguistic levels, Morphological, Lexical and Syntactic. Through this analysis this study tries to examine the reduction process of their grammatical errors and to find out the types of linguistic interference they encounter from the viewpoint of pedagogical implications.

An Essay on Henry Fielding's Narrative Method

Hiroshi WATANABE

In the previous paper I have tried to make out what Fielding intended through digressions and authorial intrusions, and here are discussed the purpose and effect of his characterization and ironical style. Both of these factors, together with those discussed before, co-operate to alienate us from the story, but this alienation, or the distance thus produced between the readers and the story, facilitates the former to evaluate the latter in a proper and natural perspective. This, it seems to me, is the greatest merit of Fielding's peculiarly external attitude to his characters and the story.

By way of conclusion, I briefly touch upon the new 'author-work-audience' relationship introduced by the novel. And this, I believe, is a problem particularly important for the future study of literature in general.

A Study of Conrad Grebel's Letters to Thomas M nzer

Gan SAKAKIBARA

Conrad Grebel was a top-level leader of the so-called Swiss Brethren, the first Anabaptist group in Z rich. Seventy extant letters

of Conrad Grebel have been found and kept mostly in the City Library of St. Gallen, Switzerland. But this letter addressed to Thomas M \ddot{u} nzer is the longest one and recognized probably as the only one, in which we can find his theological view in general. He wrote a pamphlet which might have been undoubtedly of the highest literary value for Anabaptist study but regrettably it is not in existence at present. Accordingly this letter of his to Thomas M \ddot{u} nzer is the most important for us Anabaptist scholars in the sense that it is so valuable not only for Grebel students but also for Anabaptist students in general.

My article includes the translation of Grebel's letters to Thomas M \ddot{u} nzer and some comments on his religious thoughts. This article is particularly worth while nowadays when the M \ddot{u} nzer renaissance is spoken about.

On the Election of Israel

Yasuoki YAMASAKI

It is methodologically in order to begin with that which formed the core of Israel's confession—the Pentateuchal traditions. In 1928 Galling called attention to the fact that a peculiar twofold aspect of statements about the election of Israel may be discerned in the Old Testament. Alongside the talk of Israel's election in the event of the deliverance from Egypt, which may be found evenly distributed throughout all the different parts of the O. T., there stands the insistence that the election of Israel is grounded in the election of its patriarchs Abraham, Isaac, and Jacob.

Yet we may say that some of the finest fruits of O. T. come as a transfiguration of election. The most familiar of transformations is in the words of Amos, and the divine choice of Israel, according to the teaching familiarized by Deuteronomy, ensured prosperity on the single condition of obedience.

The Logical System of Lenin's Work "Imperialism" and the Law of Unequal Economic Development

Hitoshi KOJIMA

1. The law is based on the logical system of "Imperialism".